

ラーダーラマン神の一 日

東方研究会専任研究員 及川 弘美

さて、今回も前回に引き続きラーダーラマン（ラーダーとクリシュナのこと）寺院のムールティ（神像）についてお話ししましょう。

ムールティが、毎日手厚く世話されることは前回触れましたが、どのように世話をされるか少し詳しくお話ししたいと思います。ムールティは、毎日アーラティといわれる儀式によつて祀られます。アーラティとはヒンドゥー教一般に見られる伝統的な儀式です。ヒンディー語の辞書を引くと「献火・神像の頭上に燈火を捧げる礼、非常な尊敬、愛、奉仕を捧げること」とありますように、アーラティは木でできたラクリーと

いわれる棒状のものを数本、ギー（精製バター）に浸して火を灯して燭台に立て、それをヒンドゥー僧が右手に持ちムールティの前にかざして、手首を小刻みに回転させながらゆっくり上下に動かすということが、数回繰り返される儀式です。ラーダーラマン寺院では、一日七回、特別なお祭りがあるときは八回アーラティが行われます。それらアーラティはそれぞれ名前があり、マンガル、ドューパ、シユリンガル、ラージボーグ、再びドューパ、サンディヤ、そしてシャヤン・アーラティという順でなされます。特別なお祭りの時には夕方の二回目のドュー

パ・アーラティの前にウトウサバ・アーラティがあります。アーラティではたいがい数本の灯火が用いられるが、三本または一本の灯火のみのアーラティ（マンガル、ドューパ、シヤヤン・アーラティ）、トウルシーサー樹の葉を用いた儀式を伴う灯火のアーラティの後、聖なるヤムナ河の水の入ったぼら貝を用いて同様にアーラティがなされる場合（シュリンガル、サンディヤ・アーライ）、灯火ではなく花を載せたお盆を用いたアーラティ（ラージボーグ・アーラティ）など多少違いがみられます。ところで前回、ムールティのダルシャン（参拝）は一日に二回と述べましたが、ダルシャンは時間の長短がありますが、各アーラティ毎にできることを訂正しなければなりません。そもそもアーラティは外部から入りこんでくる邪惡なものを払うという意味があり、そのためムールティが人前に姿を現す時に、必ず行われる儀式なのです。なかで

最も信者の参拝が多いのが、前回述べた時間帯に行われる早朝のマンガル・アーラティ、夕方のサンディヤ・アーラティなのです。

これらのアーラティはラーダーラマン神の日々の生活の営みと対応して行われます。まず、最初のアーラティはラーダーラマン神の起床と共に三本の灯火のみ用いられて始まります。これがマンガル・アーラティです。神の起床時間は夏季は午前四時半、冬季は同五時半、他の季節は同五時と決まっています。神は起きたばかりで、まだ衣装はきていません。アーラティの後、幕は閉じられ、神は沐浴をします。午前八時半前後、灯火が一本だけの簡単なドューパ・アーラティが済むと再び幕が閉じられ、神は朝食を取ります。第三回目のシュリンガル・アーラティは、午前九時半から十時位の間に行われます。この時、ラーダーラマン神は美しく着飾られて姿を現し、アーラティは五本の灯火、ほ

ら貝、そしてトゥルシー樹の葉などが用いられます。最後に、僧は台座に置かれた鏡を取り上げ、神の正面と両脇からの姿を神自身に見えるように映しだします。まるで、その様子はそのまま飾られた姿に神が満足しているかどうか、お伺いをたてているかのようです。さらに驚いたことには、毎日違った様々なきらびやかな美しい衣装が、神に着せられるのです。まったく、女性にとつては羨ましい限りです。そして午前十一時半頃、第四回目のラージボーグ・アーラティの後、昼食を取ると、午後はずつと夕方の次のアーラティまで神のお昼寝の時間となり、寺院の扉も閉じられあたりはひつそりとなります。午後六時頃、朝の時と同様にドューパ・アーラティがなされます。アーラティの後すぐ幕が閉じられ、神は軽食をとり、次には新たな装いで登場します。そしてサンディイヤ・アーラティが行われます。灯火は今までのアーラティの

中で最も多い九本の灯火が使われます。他はシリングガル・アーラティと同じです。この後、神は夕食を取り、装飾がはずされ、身体がきれいにされ就寝の準備が始まります。午後九時前後、就寝前のシャヤン・アーラティがひそやかに執り行われて、ラーダーラマン神の一日が終えます。

ラーダーラマン寺院では、ラーダーラマン神がこの世に顯現したとされる日から今日に至るまで約五百年近くにわたって、一日もかかさずこのように手厚く世話され、礼拝されてきました。そして信者たちはそれを当然のこととして受け入れ、ムールティの神性を疑うこともなく、毎日参拝にやつて來るのです。こうしたラーダーラマン寺院での光景は、信仰心の薄い私に改めて、信仰とは、神とはなんであるのかを考えさせられるものでした。